

現在を生きるかつての「日本人」 －台湾日本語世代の今－

亜細亜大学非常勤講師 佐藤 貴仁

職業人としての自画像（周輝慶）

玉蘭荘での出会い

台北市の中心部に玉蘭荘という高齢者のためのデイケアセンターがある。この玉蘭荘は台湾にありながら、日本語で活動が行われているところに特徴がある施設であり、その性質から現在では、日本統治時代に日本教育を受けた台湾日本語世代と呼ばれる人々が多く集う場所となっている。台湾であるにも関わらず、そこでは日本語が飛び交い、活動に関わるスタッフの多くが日本人であることから、時に日本にいと錯覚してしまうような空間の中で、周輝慶はいつも窓辺に腰を下ろし、一点を見つめるようにして、時を過ごしている。遠くのことを懐かしむような、その穏やかな眼差しの中には、一体、何が映っているのだろうか。当時、内地と呼ばれた本土から来た日本人教師に教育を受けた公学校時代のこと、あるいは、内地に留学し、卒業後はそのまま就職して、13年という年月を過ごした日本の生活のことだろうか。私は、明るい日差しが降り注ぐ窓際に座っている周輝慶を見て、その視線が捉えた先に、なぜか過去に置いてきた彼自身の姿が見えたような気がした。それを確かめるべく、本人に話を聞いてみることで、これまでの人生の一端が見えるのではないかという思いから、インタビューを申し込んだのが、彼との出会いの始まりだった。

ところで、人は誰でも老いていく。そして、年を取れば取るほど、肉体的な融通が利かなくなり、以前には普通にできたことが、段々とできなくなったりする。例えば、機敏に動けなくなる。細かい作業ができなくなる。耳が遠くなる。明瞭に

話せなくなる。周輝慶のインタビューで、私は如実にそれを感じた。震える手で書かれた文字は、確かにうねっていた。話を聞くために対面で腰を下ろしたが、「私は耳が遠いので」と言って、すぐに私の右隣に座り直したその左耳には、補聴器がついていた。また、動作の細かいコントロールが難しいのか、勢い余って横に腰掛けたため、図らずも互いの腿が密着する体勢になってしまったのだが、その脚を通して伝わってくるのは、「振戦」と呼ばれる高齢者特有の身体の震えだった。こうして否応なく突きつけられる「老い」の現象を目の当たりにして、過去の記憶の多くを忘れてしまっているのではないかという思いから、果たして上手く話を進めることができるのだろうか、一抹の不安を感じた一方で、若かりし頃は、果たしてどのような風采だったかと、その姿にふと思いを馳せてみたくもなった。

このようにして始まったインタビューだが、はじめによぎった不安は、すぐに消え去った。発言に繰り返しはあるものの、受け答えはしっかりしており、また、絞り出すように発せられる声のため、時に不明瞭ではあるが、話もきちんと聞き取れる。しかし何より、これから自分のことを話そうとするその顔つきが、しっかりとしていたのである。窓際に座っている時の穏やかな様子からは感じられない覇気のようなもの、いわば、話したいという意欲が感じられことをその表情から確かめ、落ち着いて、語りに耳を傾けることにした。

語られない過去

今年 91 歳だという周輝慶は、台湾中部の小さ

な町に生まれた。その町にあった公学校に通ったという事実から、その頃の暮らしぶりを知るために、当時はどんな生活だったか話を聞いたのだが、出てきた言葉は「公学校は、別に。退屈な生活です。別に、特別な生活ではなかったですね」と、あたかも人ごとのような、拍子抜けするほど素っ気ないものだった。なぜ拍子抜けしたかというところ、日本語世代の人々に対するインタビューをしていると、公学校時代の出来事や思い出を語る者が多く、それに慣れてきたため、彼のように、そのほとんどが語られないという例は、これまでなかったからである。しかし、その語り口から察するに、すでに本人の記憶が薄らいでいて、思い出せないという訳でもなさそうなこと、また、語りたくないという否定的な様子もなかったことから、やはり特別な出来事や思い出は、本当になかったのかもしれないと、その時にはそう思ったのだった。

公学校を卒業したのち、周輝慶は内地留学をすることになる。当時、13歳で日本に渡ることになったのだが、この経緯についても、なぜかはっきりと語られることはなかった。こちらが何度も、どうして留学することになったのかと繰り返し聞いてみても、要領を得ない答えが返ってくるだけだったのだが、その語りの断片を集めて繋げてみると、入学した中学は、公学校6年生時の担任の母校であり、その紹介で同じ公学校から4人が同時に留学したということが分かった。また、中学では寄宿生活を送ったが、その生活のことを聞いても、「あの時は、軍隊から兵隊さんが来て、学校軍官が教育した訳ですよ。軍隊的な」と語るだけで、日常においても「郷愁は感じませんでした」というたった一言でしか、その当時を振り返ることはなかったのである。

その後、大学専門部に進学したのだが、その時のことを聞いてみても、事実関係を述べるのみで、

当時の生活における内実は、ほとんど語られずじまいだった。よって、日本に渡った13歳から大学専門部卒業の20歳に至るまで、学生時代についての言及は、事実確認以外、ほとんど見られなかったことになる。それはなぜだろうか。繰り返しになるが、実際の話し振りからは、話すことを嫌がっていた様子や、インタビューをすること自体、消極的だったという印象は受けなかった。むしろ、自分のことを語りたいという意欲的な態度すら感じられたのだが、結果的に学生時代のことには、ほとんど聞けなかったことになる。それにはどのような意味があるのか。その部分をもう一度問い直すには、インタビューにおける語りとは何なのか、という基本に立ち返ざるを得ないだろう。

インタビューという行為によって、自分の過去を振り返り語る場合、語り手本人の視点によって語られ、創り出された世界そのものが、その人の「物語」なのだという考え方がある。そして、この語られた「物語」を語り手の経験に基づいた「創られた話」であると捉えれば、その人を通して懐述された「物語」は、本来の意味の「事実」ではなくなってしまう場合もある。なぜなら、そこには必ず語り手自らの解釈が入っているからである。つまり、解釈に必要なもの（＝語られること）は残されるが、そうでないもの（＝語られないこと）は消されるという「事実」の選択が生まれる。このことから、なぜ語ったのか、あるいは、なぜ語らなかったのかということと考えれば、やはりそこには、その人にとっての大きな意味が隠されているような気がするのである。

周輝慶の場合はどうだろうか。確かに、学生時代については、ほとんど語られることはなかった。また、20歳で早稲田大学専門部工科機械科（以下、早大専工機械科）を卒業してからの、およそ7年に渡る日本での社会人経験についても、実際に

沿った簡単な説明がなされたのみで、その裏にあると考えられる当時の自分の状況や、出来事を通してその時の思いなどについての言及はなかったのである。

しかし、台湾へ帰還してからの話になると、途端に雄弁になり、語りが色彩を帯び始めた。それまでは、こちらの質問にも一問一答のような、短い受け答えしかなかったのが、帰ってから85歳でリタイアするまで、職業人としてどのような仕事にあたり、そこで何を成し遂げてきたのか、時にこちらの話を遮ってまで語るというように、その話し振りに変化が見られたのである。その姿から何が言えるのか、語りの裏に隠されたストーリーに迫ってみることにする。

職業人としての誇りと裏にある後悔

昭和17年に東京の早大専工機械科を卒業後、名古屋にある三菱電機の製作所に技師として勤めたのが、周輝慶の社会人としての出発点であった。やがて、終戦を迎えたが、その時点で台湾に帰ることはせず、同じ県内の小田井鉄工所に転職をした。だが、昭和25年にその職場を辞め、13年間の日本生活にピリオドを打ち、とうとう台湾へ帰ることにしたという。だが、ここまでの語りは、そのほとんどが単なる事実確認だけのようだが、ぎこちない言及に過ぎなかったが、その後には話された台湾帰還後の職業人としての語りは、実に滔々たるものであった。そのストーリーの口火は、以下のように切られた。

「私は色々なキャリアですからね。色々なことをやった訳ですよ、台湾でね。例えば、私は製糖会社に籍を置きました。あの、台北市に本社があるんですよ。虎尾市の製糖会社へ行って、機関車の管理とか、そういうことをやってました。それから、あの、烏山頭という水庫がありますね。それで、台湾であの、一番大きい、今まで輸入して

いたゲートを台湾で設計したんです。水利局で大埔ダム、劍潭ダム、8 m × 8 m (のゲート) ね。あの、台湾でその他のゲートを一番多く設計しました」

烏山頭水庫というのは、統治時代に台湾へ渡った日本人技師である八田與一によって設計・建設された台湾の南部にあるダムのことである。ダム自体は統治時代の1930年に完成しており、現在も稼働を続けているが、その語りから、製糖会社に勤めた後はダムの保守管理に関わっていたことが窺える。その後、台北市の水道課に移り、そこで上水道整備に携わることになるのだが、それ以降、自分がどのような職場を渡り歩き、そこで何を成し遂げたのかというその歴史を語り続けたのである。

「それからあの、水道課、台北市水道課ね。建設委員、拡張委員会の材料部長として、日本からダクタイルパイプ輸入して、初めて、それも初めて2 mのパイプね、それ輸入して、台北市の(上水道)幹線に使った訳ですよ。それから、その後、七星サイダー工場の建設をして、その工場長として、管理していた訳ですよ。

それからもう一つ、台湾ガラスっていう会社がね、黒松が買わないため、サイダーのビンを作って、サイダーも自分で作るって。で、私、新竹市香山の台湾ガラスの工場の中に、サイダー工場を設計して、建設しました。二つ、サイダー工場を建設した訳ですよ。

それから、汐止という所で、鉍砂からインゴットを作る製鋼工場の工場長になって、それから、コンデンサーを自分で造った。自分で造ったんですよ。それもオイルショックで、やめました。それから、水道課に戻ってね。あの、台湾大学の前の、新店溪水源地に40万 t/dの、一日、水を処理する浄水場で設計が終わってから、そこで主任として管理しました。水道はね、台北市に供給されてる。

それから、小型焼却炉、日本で一番大きい、あの、日本インシナーが台北インシナー会社を、はじめは輸出でコストの関係で、台湾で焼却炉を作ったんです。そこの社長として、焼却炉を230台くらい売った訳ですよ。それも台湾一、たくさん売れた訳ですよ。あのとき、初めて台湾でも焼却が発達したんですよ。それで、それから、高雄市の石油工場で、青木機械の機械技師として、大型焼却炉建設に参加しました。

それでね、85歳まで勤めていましたです。コンサルタントって知ってるでしょ？それから、リタイアした訳ですよ。あの、ダムの水門、その時一番大きかったです。焼却炉も一番多く売ったんです。それから二つ、台湾で一番大きいサイダー工場を建設したんです。三つの台湾一、ははは。だから、機械屋になったけれど、ま、そういう経験、実績を作ったことが、結局、慰めになったんですよ」

最後に「慰めになった」という言葉が出てきた。この「慰め」とはいったいどういう意味なのだろうか。そこに焦点を当てることにより、また新たな事実が浮かび上がってくる。それは早大専工機械科に進学する際の話に遡る。

「医科とね、工科両方受かったんですよ。それで、医者の方、捨ててね、技術者になったんですよ。

その時、日本に行った台湾人は、皆、医者を目指していたんですよ。私はあまのじゃくでね、ちょっと変わった方向へ進んだ訳です」

周輝慶は進学先に医科を選ばなかった。その理由は「あまのじゃく」だったからということ以外、語られることはなかった。だとしたら、止めどなくあふれ出た、技師としての自分に関する語りは何を意味しているのだろうか。それは、「変わった方向へ進んだ」ことを悔いている一方、「医者にならなかった」慰めとして、その思いを打ち消すかのごとく技術者としての仕事に邁進し、その結

果を残してきたという、自己の誇りの裏にある後悔の表れなのだろうか。

台湾留学組のそのほとんど誰もが皆、進学が目標にしていた医科に合格したにも関わらず、その道を選び取らなかった事実を、周輝慶が現在どう思っているのかを尋ねると、「後悔したけれども、しょうがない。台湾でたくさん建設に参加してきて、色々な経歴を、実績を作ったことが、せめてもの慰め。医者なら、簡単に金持ちになってたけど」と、赤裸裸なその気持ちを吐露したのだ。続けて、はっきりと後悔したのはいつだったのか聞いてみたところ、その質問には直接答えずに、「今は、もう後悔してもしょうがないでしょ」と、言い放ったのである。これまでと、口調こそ変わらなかったものの、これが唯一、このインタビューで感情を露にした場面だったように思う。

目標にしていたと考えられる医科には進まずに、工科を進んだこと。この、選択しなかった、あるいは、選択できなかった道を歩まなかったことを、晩年においても悔やんでいるというその気持ちは、これまでの人生において、常に心のどこかに潜んでいた思いであったのかもしれない。そうした思いを打ち消すために、自らが選び取った進路の延長にある技師としての仕事を通して、それに打ち込み、誇りを持って仕事にあたり、充実感を得ることで、その時々を自己を肯定していたとも捉えられる。しかし、そう考えると、その思いは複雑であるし、学生時代のことが語られなかった理由も、もしかしたら工科への進路を選択したことに、何か関係があるのかもしれないと思ってしまうが、それは邪推だろうか。ただ、このように職業人として語られた「物語」こそが、周輝慶が伝えたい自分の「事実」であり、それが自身の解釈で語られた「自画像」であることは確かだろう。その証拠として、家族の話や日常生活の話は、ほとんど語られることがなかったことか

らも窺える。

だが、職業人としていかに仕事をしてきたかという「事実」が、自分の見せたい「自画像」であるならば、日本でのおよそ7年に渡る社会人としての経験も、当然語られるべきことになるが、不思議なことに、職業人としての「自画像」に、日本における社会人時代の話は含まれていなかった。

かつて「日本人」だった自分

現在の視点から過去を振り返ること。過去に対する自己言及というのは、現在の自分を肯定することに繋がっているのかもしれない。周輝慶が描いた「自画像」は、職業人としての自分だった。それは、現在の自分から捉えた、技術者としてのこれまでの人生の「自画像」でもあると言えるのだろう。そう考えると、過去を語りながらも、実はその振り返りは自己回帰的な行為として、今の自分に立ち返り、そして、それを語ることに繋がっているのではないかとも思える。それは、医科に進まなかった自分を後悔しつつも、技術者として仕事で結果を残しながら全うしたその人生を、現在の自分から振り返ることにより、「これではよかったんだ」と、自ら納得させるような行為であったのかもしれないと思うからである。しかし、その中には、日本で社会人として生活していた時の経験は含まれていなかった。それはなぜだろうか。そのヒントに繋がる言葉が、インタビューの最中に突然放たれた。「私、兵隊に行かなかったんですよ」と発言し、続けて、そのことに後ろめたさを感じていると語ったのである。

「(兵隊に行かなかったのは) 軍需工場に勤めたからと思うんですよ。国のためには、申し訳ないって。台湾、教育はね、成功しましたよ。例えば、特攻隊に参加する、と、そういう意欲を起こさせるように教育した。日本教育は成功しましたよ」

最初に勤めた電機メーカーの製作所は軍需工場だった。入社した昭和17年という時代から考えると、それは仕方がなく、また、仕事として「何がしたい」という選択肢はなかったのかもしれない。それとは逆に、国ために戦争に行かなかったことを、今でも「申し訳ない」と話すその言葉の裏には、かつては「日本人」であった自分が、実は国のためには何もできなかったという、ある種の無念さを滲ませた言葉であると捉えることもできるだろう。公学校から早大専工に至るまで、すべての教育を「日本人」として日本語で受け、日本で13年に渡り暮らしていたというその過去を考えれば、それも不思議ではない。そんな自分を振り返り、内地の日本人と同様に、台湾人子弟を化育することを標榜した統治時代の台湾における日本の教育を、「日本教育は成功しました」と、当事者である自分が、客観的に語ることの複雑さは、本人しか知る由がない。そう考えると、「日本人」だと当たり前のように思っていた自分が、終戦を機に「日本人」でなくなったという得も言われぬ状態は、本人にとっても、捉えようにも捉えきれないことであるかもしれない。とすると、インタビューにおける、台湾帰還前と後の語りの厚みの違いは、台湾人としての現在の自分が、かつて「日本人」であったという、その語り得なさからきているかもしれないと思えるのである。

だとすれば、医科に進まなかった無念さに加え、かつて「日本人」であった自分を忘れ去るために仕事に没頭し、85歳になるまでその職務を全うした人生を送ることで、台湾における職業人としての「自画像」を作り上げたのだと解釈することもできる。だが、「自画像」は、やはり「像」であり、そこには語られなかった別の「事実」が、どうしようもなく存在しているのである。そして、その「事実」を含めた人生そのものを振り返ると、かつて「日本人」であった自分も、現在は台湾人として存在している自身の連続した一部である

ことは分ち難い「事実」であり、ゆえにその部分だけを切り取って、記憶から葬り去ることなどできるはずがないのかもしれない。そうした、今は紛れもなく台湾人であり、決して「日本人」ではないという自分についての語り得なさを、彼自身は現在、どのように受け止めているのだろうか。

玉蘭荘に来る理由

インタビューの終盤、台湾に帰還してからは、日本統治終了後の新たな社会の言語である北京語を自分で覚えなければならなかったという話をしていた時に、周輝慶は実に唐突に「だから玉蘭荘ってね、ボランティアが親切ですよ。私に来るのは、やっぱりボランティアを見るため。ははは、そのためですよ」と脈絡もなく語った。玉蘭荘とは全く関係のない話をしていたのだが、本人にとっては、その話題が玉蘭荘にまつわる何かを想起させたのかもしれない。

続けて、「とても親切ですよ、日本の方ね。やっぱりこういう雰囲気が好きで来ている訳ですよ。ボランティアさんがとても親切でね。まあ、ボランティア見るとね、楽しいですね。見るだけで楽しいですよ。話ししなくても。親切でね」と話し、今では「近くに日本人がいたら」それだけで和やかな気分になるのだという。その姿に、私は、今の本人と過去に置いてきたかつての「日本人」であった本人が、一瞬、二重写しであるかのような

錯覚を覚えた。しかし、それは別の人物ではない。「日本人」であっても、台湾人であっても、そのどちらもが周輝慶であり、それは紛れもなく同一人物なのである。社会が大きく変化しようとも、彼は生まれてからこれまでずっと、周輝慶という一人の人間として、現在もあり続けているのだ。しかし、歴史に翻弄されてしまったことにより、「日本人」としての自分は過去に置いて来ざるを得なかった。そんな彼は、玉蘭荘に自分の中の「日本」を求めているだけなのかもしれない。その一つの象徴である日本人ボランティアスタッフに、日本を感じている一方、話す訳でも、何かをする訳でもなく、その人たちの姿を眺めているだけでも楽しいとは、一体どのような心境なのだろうか。その理由を尋ねてみると、「ま、日本で教育受けた関係でしょうね。日本に長くいた、その関係だと思いますけどね。とても和やか、とても親切で、それを楽しみに来るだけ」と語るその横顔は実におだやかで、そして、嬉しそうなのである。

やはり周輝慶は日本の生活を忘れた訳ではなかったのだ。そんな彼に、話さなくてもただ日本人が近くにいるだけでいいのかと、続けて尋ねてみると、「そうそうそう、それでいいんです、顔見てね。杖ついて、無理してきている訳ですよ、もう91ですから」と、その気持ちを穏やかに語る視線の先に映っているのは、やはり過去に置いてきた彼自身の姿であるのかもしれない。